

国語教育 207

☆ 東京都小学校国語教育研究会・機関誌 2015. 7

未来を拓く国語教育の創造

会長 鶴 巻 景 子

二十一世紀がスタートするとき、政治・経済や科学・技術、社会・教育やスポーツ・芸能など、あらゆる分野の専門家が「これからどうなるのだろうか。」と、変化の激しい不透明な時代を予測し、展望や未来にかける希望を語っていた。それから二十五年、四半世紀が過ぎようとしている。社会や教育はどう変わってきているのだろうか。

科学の進歩と共に、生活の中にコンピューターやインターネットが身近になり、本や新聞を読むより、インターネットで情報を得たり、直接、会話や手紙で関わるより、ラインやメールでつながり合ったりすることが多くなった。覚えた知識は、あつという間に古くなっていく。変化のスピードが速くなり、じつくりと取り組むより、むしろ効率的に進めることが求められるようになった。

そうした中で、子供たちの言語生活も大きく変化してきているのではないだろうか。語彙の獲得、言葉によるコミュニケーション力、しっかりと考え表現する力、言語により主体的に探求していく学びへの意欲など、様々な課題が見られる。こうした時代だからこそ、未来を担う子供たちに、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持つ自立した人間として、豊かな言葉の力を育て、他者と協働しながら未来を切り開いていく力を身に付けさせたい。

長く都小国研をご指導くださった倉澤栄吉先生は、次のように述べている。『国語単元学習は、子供とは、言葉とは、子供の言語生活とは何だろうか、指導者が自らに問いかけていくうちに少しずつわかったと思えてくるような実践。○創意工夫を軸に、一歩一歩ずつ辿っていくうちに少しは成果が上がリ、指導の喜びが、心底からこみ上げてくるような思いがする実践。○週末を知らない学習指導であり、貪欲な研究者によって常に未来が寛容に拓かれていて、その人々に失望を与えることのない実践。』（解説 国語単元学習 東洋館出版）と述べている。

今年度から研究主題を新たに組み組んでいく。部会名も新たにしました。短い時間で子供たちの変容をすぐに求めがちな時代であるが、それぞれの部会でこれまでの研究の成果を見直し、新たな視点でじっくりと子供たちに、ことば・言葉、こころ・心が育つ国語教育を模索して、未来を拓く国語教育を創り出していきたい。

（杉並区立高井戸小学校）

平成二十六年年度

研究活動報告

事務局次長 大畑 賢一

研究主題

「言葉の学び手が育つ」

国語教育の創造

主体的に学ぶ児童を育てる

指導と評価の一体化

一 研究大会事業

1 総会・研究委員総会

五月八日(木)

練馬区立光が丘夏の雲小学校

・遠藤真司会長以下新役員承認

・事業報告、事業計画

・講演

「言葉の学び手が育つ」

国語教育の創造

筑波大学名誉教授

鳴島 甫先生

2 多摩地区大会

六月六日(木)

三鷹市立大沢台小学校

・公開授業

三鷹市立大沢台小学校

白石 華子主任教諭

・指導講評

本会前会長 神野 雅博先生

3 まなび塾

七月二十六日(土)

台東区立谷中小学校

元台東区立育英小学校校長

藤井 治先生

4 研究大会

二月二十日(金)

文京区立蓮町小学校

・公開授業 四研究部会

・分科会提案 発表

二 研究調査事業

【聞く・話す部】

「筋道を立てて考え、自己

充実を図る話し合いの指導」

主体的に学ぶ児童を育てる

指導と評価の一体化

・公開授業 十一月八日(月)

豊島区立高南小学校

折田 真一教諭

・講師 本会参与 河村 静枝先生

【読解読書部】

「論理的思考力を育む読みの

指導と評価の一体化」

説明的文章の読みにおける

言語活動の充実を通して

・公開授業 十月十六日(木)

荒川区立汐入小学校

山内 由希教諭

・講師

【作文部】

「言語生活に根ざした

書き手が育つ学習指導の工夫」

主体的な書く活動を促す指導と

評価の一体化

・公開授業 十一月四日(火)

大田区立田園調布小学校

有川 佳孝教諭

・講師 東京学芸大学教授

大熊 徹先生

【言語部】

「言葉への関心を高め、言語

感覚を磨く学習指導の展開」

伝統的な言語文化に親しむため

の学習指導と評価の一体化

・公開授業 十一月十一日(火)

練馬区立大泉第六小学校

・講師 秀明大学教授

澤 武嗣教諭

・講師 今村 久二先生

三 研究成果刊行事業

・機関誌「国語教育」発行

第二〇五号・二〇六号

・研究紀要 第三十六号発行

平成二十七年年度

都小国研 事業計画

平成27・28年度研究主題・副主題

未来を拓く

国語教育の創造

思考力・表現力・探究力が育つ

言語活動の充実

副会長 朴木 一史

一 研究主題・副主題

平成二十六年十一月に、文部科学大臣から中央教育審議会への諮問が行われ、今年度中にも中間まとめとして新たな教育の骨組みが具体的に示される。

我が国が、厳しい挑戦の時代を迎えることが予想される中、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、さらに、他の学習や生活の中で実践に生かしていくことができるようにすることが重要であり、すべての学習の核となる国語教育は極めて重要な役割を果たすことが求められる。「未来を拓く」とは、児童が主体となり、協働的な言語活動を通

して、確かに言葉の力を身に付け、身に付けた言葉の力を他教科等の学習や日常生活、さらには未来を豊かに生き抜くために活用していくことである。

そのためには、様々な言語活動を通して、自らの考えを形成し、表現し、協働的な学びを通して、課題を追究・解決していくことが重要となってくる。

このことから、副主題を「思考力・表現力・探究力が育つ言語活動の工夫」とし、平成二十七・二十八年度の二年間にわたって研究を推進していく。

二 研究大会事業

(一)総会・講演会・研究委員総会
平成二十七年五月七日(木)

杉並区立高井戸小学校

(二)多摩地区総会・研究大会

平成二十七年六月五日(金)

福生市立福生第五小学校

(三)研究大会

平成二十八年二月十九日(金)

杉並区立高井戸小学校

三 研究調査事業

(一)都小国研まなび塾

平成二十七年七月二十五日(土)

杉並区立杉並第一小学校

(二)各部会の定例研究会

各部会を超えて公開する研究授業「小研」(「大会」に対して「小研」と呼称する。)を年一回以上実施する。

(三)各部会の研究活動

①研究主題・副主題を踏まえ、各部の研究主題を設定し、授業研究を通して主題を追究する。

②各支部への研究活動を積極的に支援するための連携を深めていく。

③各研究部会は、大会をはじめ、小研、分科会研究授業、機関誌、研究紀要等に研究成果を発表する。

④単年度研究委員は、所属する部会において研究授業を行う。

(四)各支部の研究活動への協力
研究部会、顧問・参与は、各支部の国語科教育の充実に資する支援を積極的に行う。

四 研究成果報告事業

(一)機関誌「国語教育」

二〇七号、二〇八号の発行

(二)研究紀要

第三十七号の発行

単年度研究委員制度の

成果と課題

副会長 山崎 淳

都小国研の単年度研究委員制度は、都教委の教育研究員制度が廃止されたことを受け、それに代わる制度として、都小国研が独自に創設したものです。

本研究委員制度においては、教職経験年数五年から十年程度の教諭、主任教諭の中から、各支部長の推薦を受けた方を都小国研が指名して、一年間の研究をお願いしています。

今年度は、話すこと・聞くこと部に二名、読むこと部に二名、書くこと部に二名、言語文化部に一名の計七名の単年度研究委員が指名されています。

単年度研究委員は、原則として常任研究委員(各研究部の部員)とともに、授業を通じた実践研究や発表等を行うことになっていきますので、部内研、小研(各研究部の研究内容、方法を具体的に示す研究会)、そして二月の大会に向け、授業者や提案者として研究を

深めていくこととなります。

昨年度も、九名の単年度研究委員のうち、六名の方が小研や大会での授業者となって、各研究部の研究の実践化を図りました。このように、単年度研究委員制度を通して、国語教育のすそ野が広がり、都内各地域での国語教育に関する研究・実践が深まっていることを大変うれしく思っています。

一方、国語の研究は初めてという方が、各研究部が継続して取り組んできた研究に一年間だけ関わり、それなりの成果を残さなくてはならないという難しさもあります。

とはいうものの、単年度研究委員から常任研究委員となり、引き続き都小国研の研究にかかわってくださる方も多く、心強く感じているところです。

創設以来、十年以上の歴史を重ね、東京都における国語教育の実践家を育てる場として、重要な役割を果たしてきた本研究委員制度ですが、都教委の教育研究員制度が復活したこともあり、今年度限りで幕を閉じることとなります。誠に残念ではありますが、これまでのご支援に感謝申し上げます。

平成二十七年年度研究の進め方

研究主題

未来を拓く

国語教育の創造

副主題

～思考力・表現力・探究力が育つ～

言語活動の充実～

副会長 朴木 一史

一 研究主題の設定

本会は、その時代の教育課題に即して研究主題を設定し、先進的な国語教育の研究を行い、国語教育の充実のための使命を果たしてきた。とりわけ、現行の学習指導要領が全面实施された翌年の平成十五年度からは、「言葉の学び手が育つ国語教育の充実」を研究主題に据え、一年次に、言語活動を充実させた単元の開発と指導法の工夫、二年次に、児童の興味・関心、課題を生かした学習過程の工夫、三年次に主題的に学ぶ児童を育てる指導と評価の一体化を副主題とし、三年間のサイクルで研究を行い、児童が言葉の学び手として主体性が育つ実績を積み上げてきた。

今年度の研究主題・副主題を設定するに当たっては、現代社会における教育課題と新たな教育の方向性を踏まえ、児童が主体性をもって言葉の学習に取り組み、思考力・表現力を発動させて、自らの課題を追究する探究型の単元のものと、言語活動を充実させていくことに主眼を置いた。

単元開発、学習過程の工夫、評価と指導の一体化は、この研究主題に迫るためには、どれも重要なこととらえ研究の柱に据える。研究主題に迫るため身に付けさせたい言葉の力は、次の通りである。①課題を発見し設定する力、②思考し、表現する力、③協働的に学ぶ力、④多面的な視点から解決の方法を判断し、探究する力、⑤読書の力、⑥言語文化や国語の特質を感受し、尊重する力、⑦⑧①～⑥までを生活や他の学習に機能させる力

二 研究主題に迫る観点

各部会の領域特性に即して、研究推進に当たっては、次の観点に踏まえて具体的な研究内容を設定する。

(一)研究主題、副主題に即し、育

てたい言語能力と目指す児童の姿を明確にする。

(二)児童の興味関心や言語生活を踏まえて、育てたい言語能力を焦点化し、言語活動の工夫が図られる単元を開発する。

(三)主体的・協働的学びを展開し、基礎的・基本的な言語能力が確実に身に付き、活用される学習過程を工夫する。

(四)単元を通して一人一人の児童の言葉の力の育成に資する評価と指導の一体化を工夫する。

三 研究の進め方

平成二十七年年度から、研究組織の名称を「話すこと・聞くこと部会」「書くこと部会」「読むこと部会」「言語文化部会」と改める。

各部会は、研究主題を踏まえて、部会毎の研究主題を設定し、部内研、小研の研究授業を通して、研究の成果を平成二十八年二月に実施する研究大会で発表する。

また、夏季休業中に若手教員を対象とした研修会「まなび塾」において塾の運営や実践発表を行うとともに、年間を通して各部に所属する単年度研究委員の指導育成を図っていく。

言葉の力

顧問 功刀 道子

あるアンケートで自分が幸せだと感じている人の多くは、友だちや知り合いが多いと答えているという結果があった。人とかかわりには幸福感につながるということがいえる。しかし、世の中ではかわりが苦手な人が増えている。

かわりがうまくいかないために問題を起こしたり引きこもりになったりしているニュースが絶えない。大人になるにつれて多くの人とかかわる機会が増えてくる。そんな中で自分の思いをうまく伝えられなかったり、人から言われた言葉を自分の中で租借したり、受け流したりすることができないため、孤独感に陥っていく。

たいていの場合、何か問題が起こったとき、どうやって解決したらよいか考える。人とのトラブルであればできるだけ話をして理解してもらえようとする。この間には言葉が介在するが、うまく伝えられないために、一人で悩む。

人に相談するための力も弱いとすれば、自信がなくなってしまう、引きこもるしか方法がなくなる。

それぞれのもっている性格もあるが、かわる力や自信をどうやって付けていくか、改めて教育を考えてみた。

要は一人一人をどう大事にするかではないかと思うのである。一部の活発な児童だけみて満足していなかったか、一人一人をきちんと見ていたか、家庭が悪いと家のせいにしていなかったか、子供たちに十分に考えを言わせていたか、学級の児童一人一人が、今日一日、心を開いて楽しそうに会話をしていたか、教師と話をしなかった子はいなかったか等々反省点が湧いてくる。学校の教師も家庭の親も忙しくなり、じつくりと会話をすることが少なくなっている。現役の先生方は、「聞き上手」の名人になって、子供たちの表現力を磨いてほしい。

かわる力には、どのように思いを伝えるか、どのように相手の考えを受け止めて理解するかなど言葉とのかかわりが大きい。言葉の力は、かわりをつくり生きたる励みを作る基となる。

昔話と「母乳語・離乳語」

とらふことについで

参与 小林 一朗

初孫が生まれた直後に、いくつかの昔話や神話の授業を参観しました。授業中、なぜか三十年ほど前に読んだ外山滋比古先生の本を思い出しました。

『読書の方法（未知）を読む』という著書の中で、外山先生は、「幼児期にアルファ語の母乳語と、ベータ語の離乳語の二つがある」としています。そして、「母乳語が具体的、経験できる世界のものごとの言葉であるのに対して、もうひとつのことは、抽象的で、こどもの経験したことのない世界の物事をあらわす。これに、わたくしは、離乳語という名をつけた。」と述べています。同書で外山先生は、既知を読む「アルファ語読み」から未知を読む「ベータ語読み」への切り換えの大切さを主張されているわけですが、「母乳語」「離乳語」という話も大変興味深く読みました。

外山先生は「母乳語・離乳語・

ほめことば」という著書の中でも、「母乳語から離乳語へ移行するのには、おとぎばなしにまざるものはない。」「どうして、おとぎばなしでなくてはならないのか」と論を展開され「一つは、離乳語の必要とする、抽象性をもっていること。それでいて、具体性もあつて、したしみやすく、おもしろい」と記しています。

私が拝見した授業の多くは、登場人物の様子や気持ちに関する発問や応答が中心でした。現実的な言葉で説明しようとする苦勞している先生もいました。様子や気持ちを確かめ、解釈しないと安心できないのかなあ、などと感じました。昔話や神話には、代々語り継がれてきた言語文化としての魅力があります。長い時間を経ても失われることのない親しみやすさやおもしろさがあります。

孫娘が「母乳語」を理解できるようにになったら、昔話を繰り返して読み聞かせたいと思っています。それが「離乳語」への橋渡しになれば嬉しいです。何よりも、虚構の世界にひたきるような、お話のおもしろさをたっぷり味わわせたいと楽しみにしています。

すてきな「悩み」を

学習材に

参与 網 淑子

先日、(新人育成で)担当している二年生にアンケートをとった。「あなたの悩みは何ですか。」という単純な問いで、もちろん国語の学習に使うからという説明はした。「○○が苦手」「○○ができない」等々出てきたが、中に一つ、こういうものがあつた。「わたしは、なかのよい友達とは会話できませんが、そうでない子とは、会話できません。どうしたらいいでしょう。」

無記名でとつたので、だれだか予想がつかないが、なかなかすてきな「悩み」である、まずは感心してしまった。勉強や運動、忘れ物などの悩みが多い中で、友達との関係に目を向けた悩み、それも前向きなものがあるとは。

程なく学級で授業をする機会があり、この子の悩みを話題として取り上げた。単元名は「おなやみそうだんの答えを考えてあげよう」、ねらいは「友達の話を受け

つなげながら話し合う」である。グループに分かれ、身近な友達の悩みを解決するために、子どもたちは、意欲的に話し合った。この話題は、一人一人が自分の経験を基に考えることができるためか、様々な考えが出された。「遊びにさそう。」「ほめるところを見つけよう。」「興味や特技の話題で話しかける。」「その他に、その子と仲良しの友達に誘ってもらって一緒に遊ぶ。」という、人との関係を活用する考えも出てきた。

子どもたちは、「自分の考えに似ている。」「自分は別の方法を考えた。」など他の子の考えと比べながら、熱心に答えを探っていた。「友達の悩みによい答えを見つけよう。」という思いから、自然に、人の話をよく聞き、受けたりつなげたりして話し合いも盛り上がり上がった。そして一人一人の考えがよく考えていた。この悩みを出した当人もこの場にいたので、大いに参考になったはずである。偶然のたまものとはいえ、話し合いの学習における「話題の大切さ」を改めて感じた、六月のある日であった。

もつと授業の中に

音声の学習を

参与 井上 紋子

新学習指導要領の「読むこと」の中に、「音読・朗読」の項目が低・中・高すべての学年に入った。子供たちだけでなく大人も言葉が乱れてきている今、「話すこと・聞くこと」の学習と結びつけて考えてみたい。

音読・朗読は文章の内容を感じて味わい解釈して音声化する、話し言葉も自分の気持ちや考えを音声化して伝えている。どちらも表現する人の心を言葉の音に乗せて伝えている。

主体的な言葉の表現者を育てるためには「話すこと・聞くこと」の指導内容である姿勢や口形・声の大きさや速さ、はっきりとした発音で話す等の力を育てることが、豊かな音読・朗読の力につながる。しかし、教える側にもこのことへの認識が弱いように思える。さらに、相手を意識した言葉の抑揚や強弱・間の取り方等の学習は、朗読にも話し言葉にも生か

され、自分の考えをより効果的に伝えるための重要な要素になると考えている。

元来子供たちは声を出すことが大好きだ。国語の授業を通して、声を出すことの楽しさを思いっきり享受して、日本語を愛し大切にすると育てたいと思う。

スタートの低学年では、言葉と遊ぶことを通して豊かな日本語の響きやリズムをそのまま体の中に入れてさせる。文字を言葉のかたちとして捉える訓練を自然にし、人物に同化して表現したり、友達の表現を聞いたりしてイメージを広げる学習を取り入れる。

中学年からは、中心人物像を捉えて豆太や松井さんの気持ちを生き生きと音読で表現させたり、自分の話す言葉に心に乗せた話し方ができる子に育てたい。

高学年では、読み手の捉えた感動や解釈が音声となって様々に表出され相手に届く意識をもたせる。音声化した言葉を通して内容や相手への理解を深め、分かり合う人間力を育てる学習にする。

音読の音が響き、子供たちの明るく豊かな話し言葉が聞こえてくる教室を目指したい。

編集後記

五月七日、杉並区立高井戸小学校にて総会が開催され、平成二十七年東京都立国語教育研究会の活動がスタートいたしました。

講演会では、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、水戸部修治先生から「課題の解決に向けて主体的・協働的に学ぶ国語科の授業づくり」というテーマで、今年度より掲げた本会の研究主題「未来を拓く国語教育の創造」にせまるための基礎・基本となる貴重な指導をいただきました。

平成二十八年度には、全国小学校国語研究東京大会が開催されます。それに向けての準備も始まっています。研究組織を見直し、四部会の名称を「話すこと・聞くこと部会」「書くこと部会」「読むこと部会」「言語文化部会」としました。また、実行委員会等の組織を新たに編成いたしました。

ご多用の中、玉稿をお寄せくださいました先生方、ありがとうございました。機関誌「国語教育」の発行が研究活動の一層の充実につながることを信じております。

足立区立千寿双葉小学校

小幡 育代